第２稿

これは、私たちが、演劇を、

楽しむためだけの、お話し。

　　　作：甲斐清和高校演劇部

【登場人物】

ナツナ：はっきり，突っ込み

フユキ：すっきり，クール

ハルミ：おっとり，ぽやーん

アキヒト：じっとり，気分や

シキ：進行役，お話を進めたいときにとっても便利な人

黒い人：セリフはない。うそ、１個だけある（実は２回）

・シキ、花道に登場。暗いまま。

シキ：ここは、とある高校のとある教室である。暇を持て余した高校生たちが今からここに集う。はっきりと先に言っておこう。この高校生たちは、演劇部員ではない。断じてない。

・開幕

・幕が開くと教室風景，放課後（夕方の様相）

・教室内には誰もいない。

・しばらくすると、ナツナとフユキが入ってくる（上手の花道から）。話しながら（歌いながら）入ってきて椅子に座る。

ナツナ「なつなつなつなつココ～ナ～ッツ🎶あいあいあいあいアイランド～♪」

フユキ「もう夏、終わって秋なんだけど」

ナツナ「いいの！夏が好きなの！あー、１年中夏だったらいいのになぁ！」

フユキ「熱帯雨林に引っ越せば」

ナツナ「もう、フユキは冷たいんだから～。はぁ～、それにしても、授業疲れたぁ…」

フユキ「そうだね」

ナツナ「とりあえず、まだみんな来てないし、暇ぁ。なんか面白いことないかな」

フユキ「そうだね、例えば？」

ナツナ「たとえば…（考える）、幽霊が出るとか！」

・おどろおどろしいＢＧＭ

ナツナ「うらめしや～……なんて（笑）」

フユキ「ふーん、いかにも夏って感じ。それっぽい効果音入ってたし」

ナツナ「それは言っちゃあいけないんじゃあ…。って、ちょっとフユキ！なんでさっきからそんなテンションなわけ！？」

フユキ「え？別に普通だし」

ナツナ「え？別に普通だぁ～しぃ～？？？…まぁ、あんたに最初から期待してないけどさ」

フユキ「じゃあ、別にいいや」

ナツナ「えっ、ちょ、なんでそんなにクールなのよ！ちょっとくらい構ってよ！アキヒト来るまで暇だしさー。ハルミもまだ来ないしー。この暇をもてあましたナツナちゃんをかわいそうに思うなら！フユキだけが頼りなんだって！ね！お願い！」

フユキ「そんなこと言われても」

ナツナ「ホントもうちょいテンション上げるだけでいいから！ね！じゃないと私寂しくて死んじゃうよ…？（泣きまね）」

フユキ「あーはいはい。泣くな泣くな。お菓子上げるからさ」

・フユキはナツナにお菓子を差し出す。瞬時にそのお菓子を受け取るナツナ。

ナツナ「わ～い！ありがと！って、お菓子ないじゃん」

フユキ「ここはあるって設定」

ナツナ「そっかー。じゃ、もう１回。…（仕切り直して）…もうちょっとテンションあげてよ！じゃないと私寂しくて死んじゃうよ…？（泣きまね）」

フユキ「あーはいはい。泣くな泣くな。お菓子上げるからさ」

・フユキはナツナにお菓子を差し出す（実物なし）。瞬時にそのお菓子を受け取るナツナ。

ナツナ「わ～い！ありがと！」

フユキ「簡単な奴」

ナツナ「ん？なんか言った？」

フユキ「別に」

ナツナ「あーほら、すぐそのテンション！テンション上げてくれるって約束したでしょ！」

フユキ「そんな約束してない」

ナツナ「したって！えーと、ほら、２ページの２１行目に書いてある。ほらフユキのセリフ。泣くな泣くなの前に、『あー、はいはい』って。これって肯定のハイだよね！yesだよね！だから、ほらほら！」

フユキ「それ言っちゃダメなことじゃ…。っていうか、あの黒いの何？」

ナツナ「いいから！いいから！話すすまないし！だから、ハイ！」

・黒が登場し、机上のグロッケンを奏でる。フユキはしばらく葛藤するが、豹変する。

フユキ「うん、わかった！↗」

ナツナ「いいねー！！それそれ、そのテンション！あ、それよりさ、昨日のテレビ見た？」

フユキ「ん？なんの？↗」

ナツナ「あれだよ！世界回るやつ。番組名なんだっけ（笑）」

フユキ「あーーー↗」

ナツナ「面白かったよね！」

フユキ「そうなんじゃない↗」

ナツナ「ねぇ、フユキはどこがおもしろかった？あたしは、アマゾン川で船にのってたら、ワニの大群に襲われて、食べられちゃったところ！やっぱテレビで人が食べられちゃうのはまずいよね～」

フユキ「へー、食べられちゃったんだー。そっかー、でもー、ひとつ言っていいー？↗」

ナツナ「ん？」

フユキ「今ウチの家、テレビ壊れてるんだよねーー♪↗」

ナツナ「え、そうなの」

フユキ「そう、もう２か月」

ナツナ「２カ月」

フユキ「だから見られないんだ～♪↗」

ナツナ「あ、うん、なんか、ごめん。一人で舞い上がって」

フユキ「いいのいいの、気にしないでいいよー♪これってお約束だ・か・ら♫↗」

・シキ上手花道へ

・ＳＥ

シキ「ここで、わたくしシキの登場です！あ、冒頭でナレーションしてたのはわたくしですよ～。わたくし本編には出ません。今回は説明係というか、このお話の調整役としてこの場に選抜されております。以降何回か出てきますが、私のことについては、そこのところを踏まえてごらん頂き、本編をお楽しみください。えーと、ナツナにより、フユキの人格が豹変し、表向きは楽しい会話が繰り広げられたか、と思いきやまさかのフユキ家のテレビが壊れている…というこんなところでもなければありえない状況により、なんとも言えない沈黙が、今舞台上に発生しております。だって、ありえます？今どきテレビが壊れて見れない状況が２カ月も続いているなんて！」

シキ「ま、とにもかくにもこのまま沈黙でも困るので…（こほん）。思うままご都合主義的に進行させてしまいましょう！…というわけで、こんな状況を変えたいときの定番！新しい人物投入！ハルミ召喚！！」

・ＳＥ

・シキはける

・ハルミが客席から登場。歌いながら現れる。

ハルミ「はーーーーーーーーーい！　はぁ～るを愛するひ～と～は～、こーころ清きひと～♪」

・ナツナとフユキは驚く。

ナツナ「ハルミ！何その現れ方！」

ハルミ「え、誰か呼んでなかった？」

フユキ「呼んでないよ～♫」

ハルミ「おっかしいなぁ。呼ばれたような気がしたから返事して入って来たのに」

ナツナ「それにその歌！なんで歌いながら入ってくるのよ！」

ハルミ「えっ、なんか音響さんが、ＢＧＭ考えるの面倒くさいから、自分で登場の音楽つけて入れって」

ナツナ「あー、それダメ。言っちゃだめなヤツ！あー…、そんなことより、遅かったじゃない」

ハルミ「うん、まあね。ちょっと人知を超えた何かの力によって動けなくなってたんだ！まだだー、おまえはまだだーって感じ」

フユキ「どういうこと～？↗」

ナツナ「ま、まあ、いいじゃん」

ハルミ「まぁ、いいね。あっ、それよりさー、昨日のテレビ見た～？」

ナツナ「うん！やっぱりアマゾンのところがいいよね！」

ハルミ「そうそうアマゾンがやっぱり一番！」

ナツナ「でしょ！ホントに特にワニのところがサイコー！」

ハルミ「うんうん、ワニがいちばん…って、え？」

ナツナ「え？」

ハルミ「いや、さすがにワニは買えないでしょ」

ナツナ「は？」

フユキ「おんなじ番組見てたって解釈じゃまずいかなー↗」

ナツナ・ハルミ「だって、あれでしょ」

ナツナ「【こんな時間に世界の果てまで行って来い！】」ハルミ「【大潜入！これが巨大通販会社の舞台裏２４時！】」

ナツナ・ハルミ「ん？」

フユキ「出たー！同時セリフ！でも、同時に違うこと言っても、実は何言ってるかわからなーい♫↗」

ナツナ「だから！【こんな時間に世界の果てまで行って来い！】」

ハルミ「私が言ったのは、【大潜入！これが巨大通販会社の舞台裏２４時】だよ」

フユキ「おーい、大丈夫かい？でも、きっと、今置かれてるこの状況はー、君たちなら理解できるはず♫⤴」

ナツナ「あ、アマゾン違いか。勘違いね…。すみま千円二千円！」

ハルミ「いやいやもっと三千円！」

フユキ「んーーーーーー、帰る」

ナツナ「ちょいちょいちょいちょい！フユキ待たれよ！」

ハルミ「そーだ、そーだ！アキヒトに呼ばれてるんじゃん！帰っちゃだめだよー」

フユキ「（ガクッ）……………絶え間ない苦痛を与えられている…。本来のキャラとは真逆のキャラを演じさせられ、さらに尋常ではないくらいの鳥肌が立つようなセリフを言わされる…」

ナツナ「あー、テンションアゲアゲの件は悪かったって、それはもういいからさー。鳥肌は…」

ハルミ「うわっ、すっごい鳥肌！」

フユキ「それに、この話題にはどうにもついていけそうにない。……テレビ見れないからな」

ハルミ「あ、フユキがすねた」

ナツナ「すねたぁ」

フユキ「……帰る」

ナツナ「あーーーー、もう悪かったって！」

フユキ「あまりオレをおちょくると、こっちにも考えがある…」

ナツナ「どんな？」

フユキ「……いや、何もないけど」

ハルミ「ないんかい！……あー、そういえば！アキヒトが来るまでの間さぁ、ちょっとこれ見てよ！」

・ハルミが荷物から謎の物体を取り出す。

ナツナ「ん？なに」

ハルミ「なんか甲府駅をおりて県庁防災会館の角をちょいと曲がってオリオン通りを通り過ぎ、春日あべにゅーにはいって２分間まっしぐら～なところで…拾った！」

ナツナ「おお？？？」

フユキ「全く地理的でない説明…」

ハルミ「じゃじゃじゃじゃーーーん！普通のティッシューーーー！」

フユキ「……そうか、良かったな。これでいつでも鼻がかめて安心じゃないか」

ハルミ「うん、そうそう私花粉症でさぁ……ってこれじゃなかった！今度こそじゃじゃじゃじゃーーーん（ＢＧＭ）！（ドラ●もんっぽく）よくわかんない機械～～～」

フユキ「そんな怪しいもの、拾ってきてよかったのか」

ハルミ「あ、ドラ●もんはスルーなのね」

ナツナ「見せて見せて」

フユキ「拾ったものだからな、壊すなよ」

ナツナ「え、それって何かのフラグ？大丈夫だって！あたしこう見えてもー、機械音痴なんで！（キリッ）」

フユキ「音痴なのかよ」

ハルミ「まぁまぁ見てみ～」

・黒が登場し、ナツナが機械を見ている後方（客席から見えるように）待機。ハルミは気づいてギョッとする。

ナツナ「どれどれー。ふむふむ。ほうほう。なるほどなるほど」

黒「パキッ」

・黒はセリフを言うと、あっという間に去っていく。

ナツナ「あ」

フユキ「今、あ、って言った」

ハルミ「ナツナ！何してんの！っていうか、今、なんか黒いのいたよね！」

ナツナ「ごめん、やっぱりあたしには理解できなかった」

フユキ「分からないのに、よくそこまで触る勇気があったな」

ハルミ「ナツナ！フユキ！ちょっと！今なんか黒いのいたって！」

フユキ「まったく…」

ナツナ「だからごめんって！」

ハルミ「ねえ！２人とも！黒いの…」

ナツナ・フユキ「それは見えない設定！！」

ハルミ「あ、はい」

フユキ「まったく…。じゃあ、ちょっと戻るよ。１４行くらい戻ればいい？」

ナツナ「オッケー」

ハルミ「………はーい」

ナツナ「（機械を持つ）どれどれー。ふむふむ。ほうほう。なるほどなるほど」

・黒あわてて登場

黒「パキッ」

ナツナ「あ」

フユキ「今、あ、って言った」

ハルミ「ナツナ！何してんの！」

ナツナ「ごめん、やっぱりあたしには理解できなかった…。それによくわかんない機械だから何したのかもわからない…ぐふ（倒れる）」

ハルミ「ナツナ！ナツナ！」

ナツナ「あとは頼んだ…（ガクっ）」

ハルミ「って！なに勝手に逃げようとしてるのよ！！」

ナツナ「あ、バレた？☆」

ハルミ「バレるわ！」

フユキ「で、なんか変化が？」

ナツナ「それが、なんかパキっていってたけど」

ハルミ「うん、パキッて言ってたねー。黒い人が。っていうか、あの黒い人しゃべっちゃダメなんじゃ…」

フユキ「だからそれ言わない！もーそんな場合じゃないだろ」

ハルミ「そんなに言わなくても」

フユキ「そんなことより、パキってやばくないか？」

ナツナ「うん、きっとやばい」

ハルミ「うん、たぶんやばい」

ナツナ「いや、絶対やばい」

ハルミ「うんうん、日本規模でやばい」

ナツナ「いやいや、世界規模でやばい」

フユキ「ナツナにはそれ言う資格ないと思う」

ナツナ「あ、だよね…。そうそう、パキッっていったあとね、なんかね、タイマーが現れたんだ（笑）」

フユキ「は？」

ナツナ「ドラマとかでよく見る時限爆弾みたいな」

ハルミ「え！うそでしょ！ありえないって！だってただの女子高生が甲府駅をおりて県庁防災会館の角をちょいと曲がってオリオン通りを通り過ぎ、春日あべにゅーにはいって２分間まっしぐら～なところでたまたま変な機械があって、拾ってきて、それが時限爆弾だったなんて！」

ナツナ「そうだよね！甲府駅をおりて県庁防災会館の角をちょいと曲がってオリオン通りを通り過ぎ、春日あべにゅーにはいって２分間まっしぐら～なところに爆弾あるなんて思わないよね！」

フユキ「まぁ、ただの女が通学のとき…ってこれやんなきゃだめか？結構時間とってる」

ナツナ「ちょっとノリ悪いぞ！フユキ！」

ハルミ「そうだよ！ここはやらなきゃ損損！」

フユキ「いや、私たちに与えられた時間は４５分…。と今、神からの啓示があった。既定では６０分使えるけど、私たちの気力・体力・威力その他もろもろを考慮した結果、４５分が限界だと…。なのでこんなことに時間を使うのは無駄だ」

ナツナ・ハルミ「神の啓示！それはやばいね！」

ナツナ「神…コモンか」

ハルミ「そうそう。神もしくは鬼」

・ＳＥ…雷音　・照明もピカピカ。３人は立ち上がっておびえる。

ハルミ「わぁ！神の怒り！？」

ナツナ「何なに！？すっごい良い天気なのに！！なんで！？」

・雷音おさまる。２人が息をつくと、今度は車の衝突音。　・照明も事故っぽく。

ナツナ「（キキキーーーのあとにハルミをかばって）あぶない！！！」

・ナツナとハルミはともに床に転びながら逃げる。

ナツナ「こ、これは…」

ハルミ「あぁ」

フユキ「（椅子に座ったまま冷静に）おれたち完全に照明と音響に遊ばれてるな」

ナツナ「ちょっと！（調光室に向かって）何すんの！！私たちで遊ばないでくれる！」

・音教卓からブーイング。照明地明かり（７２）のみ。

ハルミ「うわ！これじゃ何も見えないよ！！」

ナツナ「あーもう！ごめん！ごめん！私が悪かったから！」

・照明あかるくなる。

ハルミ「あー、よかったー」

ナツナ「ったく、なんであたしたちが裏方のごきげんとらなきゃいけないのよ」

・照明真っ暗に。

ハルミ「あー！！ナツナ！なに余計なこと言ってんの！さっきより容赦なく真っ暗なんだけど！」

ナツナ「た、たいへん失礼をいたしましたぁ！（ひれふす）」

ハルミ「ましたぁ！（ひれふす）」

・照明明るくなる。

ハルミ「…私たちって、照明と音響がいないとダメなのね…、結局」

ナツナ「そうだね…」

フユキ「やりたい放題」

・突然、ヒーロー登場の音楽が鳴り響く。照明も変化。３人は慌てて動く。

ナツナ「トウガラシ！火を吹く暑さ汗だくさ！エンゲキレッド！（ポーズ）」

ハルミ「カレー大好き！３杯食べてもまだいける！エンゲキイエロー！（ポーズ）

フユキ「ワサビを食べて涙目だ！！エンゲキグリーン！（ポーズ）」

ナツナ「３人そろって…」

３人「芸能戦隊エンゲキブー！！（再ポーズ）」

・ＢＧＭぶちっと切る。照明も戻る。

・３人は茫然とするが、ハッと気づく。

ナツナ「なんなのーーーー！！」

ハルミ「そうだそうだ！赤、黄ときたら、普通は青だろー。なぜ緑なんだ」

ナツナ「突っ込むところそこ！？」

フユキ「刺激物で統一したかっただけだろ」

ナツナ「演劇部カンケイないじゃん！」

フユキ「今年、実は演劇部…っていうオチじゃない演劇作ろうっていってたのにな。すでに台無し…。ま、ここまで来たらやりつづけるしかないけど」

・照明、元に戻る

フユキ「タイマーの時間は何て表示されてる？」

ナツナ「今ね、１５３３７、３６、３５、３４…」

フユキ「１時間５３分３４秒…。２時間からカウントダウンしてるな」

ナツナ「で、どうしよう、これ！」

ハルミ「とりあえず元あったところに」

フユキ「戻すな」

ナツナ「じゃあ、窓から外に」

フユキ「捨てるな」

ナツナ・ハルミ「えーーー」

フユキ「えーーじゃない。ともかく無責任にこの問題を放棄しない」

ナツナ「うぃーっす」

ハルミ「では…ゴホン！今から特別爆発物処理班を結成する。まずこの爆弾の解除方法は…」

・ＳＥ

シキ「はーい、再びのシキでございます。繰り返して言いますが、登場している人々は演劇部ではないですからね！いいですか！念を押しますからね！演劇部のお話ではないですよ！…（間）…それでは、現状を説明いたしますね。…ゴホン。説明しよう！この爆弾は…」

アキヒト「シキ何やってんの！見切れてるよ！（シキの腕をぐいぐい引っ張る）」

シキ「ちょ…アキヒト…まだあなたの出番じゃないし…。いいの、わたし、この場所が…。あの、わたし、せつめ…」

・ＳＥ

ハルミ「解除方法は………知らない！」

フユキ「だろうな。まったく無駄な時間を使うなと言ったのに、あのへん（花道）であったことも含めて無駄が多すぎる…」

ハルミ「（花道を見て）あのへん？」

ナツナ「…わかったぞ、この解除方法！これは…」

ハルミ「な、なんですって！」

ナツナ「いや、まだ何も言ってない」

ハルミ「あ、そっか。で？」

ナツナ「まぁ、簡単に言うと、この爆弾のタイマーを解除するには……（間）、面白いことを言うこと」

フユキ「は？」

ナツナ「面白いことを言うと、時間が増えていき、最終的に解除になる。で、逆に面白くないと、時間がますます減って最終的にドカーン！」

ハルミ「そ、そっか！」

フユキ「ほ、本当なのか。機械音痴のナツナが言うことだから、信用しがたい」

ナツナ「はい、今時間縮んだ～！」

フユキ「え…」

ハルミ「うかつにしゃべれない…。…くそ、こんなことが演劇にあっていいのだろうか！いや、いいはずがない！というわけで、私は永遠にしゃべり続けることを誓います！平成２９年１１月１８日甲斐清和高校生徒代表ハルミ」

ナツナ「おっ、増えたよ～！」

・ナツナとハルミがハイタッチ

ナツナ「お前ならやってくれると思ったぞ、ハルミ少佐」

ハルミ「はっ、ありがたき幸せでございます！ナツナ大佐！」

・ナツナ、ハルミは手をガシッ

フユキ「この茶番はなんだ」

ナツナ「ちょっとフユキあんたしゃべらないで、今いいところだからさっ」

フユキ「すまん…ん？オレが謝る必要ある？」

ハルミ「ちょっとフユキあんたどれだけ時間縮めたいの？協力する気あるなら、テンション上げ上げでやってくれる？」

フユキ「うっ…。うーーーー。……めんごめんご☆↗って何がじゃ！」

ナツナ「おっ、時間増えた。やればできるじゃん」

ハルミ「ここで、そのキャラ全開でできるなんて、フユキ！なんて恐ろしい子！マネできな～い！！」

フユキ「恐ろしく褒められてる気がしない」

ナツナ「ま、さっさと解除してアキヒトをゆっくり待とうよ！」

・ＳＥ

・シキ登場。花道明るく。

シキ「さっきは、ちょっと諸事情により、途中退場大変失礼をいたしました。あ、私は面白いこととか言いませんのであしからず。では…（ゴホン）…説明しよう！この爆弾の解除方法とは、中にあるすべてのコードを切ることである！そうすることによって解除できる簡単な仕組みだ！つまりナツナのやっていることはすべて無関係！……しっかし便利ですねー。ここでこうやって私がしゃべることで、こちらに都合のいい説明ができるんですからね～」

・花道の照明暗く

・ＳＥ

フユキ「あ～あ～あ～～～～～～～、津軽海峡、ふゆ～げ～し～き～～～～♪」

ナツナ「おっ、いつもはクールなフユキの熱唱で時間増えたよ～」

ハルミ「いいね！」

ナツナ「あー、もうネタ切れ。何か面白いことないかなー」

ハルミ「じゃあさ、甲斐清和あるあるしようよ～」

フユキ「それ、おもいろいのか？というか、この爆弾の時間もだけど、神からの啓示の方の、時間も大丈夫なのか？」

ハルミ「ちょっと待ってて。確認してくる」

・ハルミが上手袖の方に「今どんくらい～？」とか言いながら進むと、黒がストップウォッチを持って出てくる。ハルミはその時間を確認し、「今、●●分だよ！」とフユキとナツナに報告する。

ナツナ「あー、もう、それダメだって～。これ、演劇部じゃないよって設定でやってるんだからさぁ…」

フユキ「ナツナ、ここはなかったことにしよう。とりあえず、●●分なら、甲斐清和あるあるをする時間はあるだろう。これによって、爆弾の方の時間を増やして解除できるかもしれないからな」

ナツナ「だね。よーし、じゃあやろう」

ナツナ・フユキ・ハルミ「甲斐清和あるあるー！」

ナツナ「伊藤うた先生の存在感ハンパない」

フユキ・ハルミ「あるある」

ナツナ「創立者って以上の存在感だよね！各教室にうた先生の肖像飾ってあるし、職員室の前に銅像とか！」

フユキ「それだけ偉大ってことだな。なにせ、２９歳で夫を亡くしたうた先生は、夫を亡くした女性でも自立して生活できるようにと、学校をつくることを決断したんだからな。そして、４人の子どもを実家に預けて単身東京でそのために勉強をする」

ナツナ「まだ中央線全線開通してなくて、勝沼から高尾まで徒歩とか！」

ハルミ「偉大だわ～」

ナツナ「っていうか、あたしたち、うた先生について刷り込まれすぎじゃない？明治３３年、西暦１９００年開校だから、もう１００年以上も前のことなのに！」

フユキ「創立記念日と、うた先生の命日のたびに、全校放送で校長が話すし、道徳でうた先生について勉強する時間もあるしな」

ナツナ「やば、これって全然おもしろい話じゃなくない？」

ハルミ「時間すごい減ってる」

ナツナ「やばーい！次いこう、次！」

３人「甲斐清和あるあるー！」

ハルミ「校舎多すぎ」

ナツナ・フユキ「あるある」

ハルミ「本校舎でしょー、西校舎でしょー、北校舎でしょー、音楽棟でしょー、記念館でしょー、体育館も離れてるし、いちいち靴はいて上履き持って移動するのめんどくさい」

ナツナ「わかるー」

ハルミ「極めつけにグラウンドが遠すぎ！バスで１０分！」

ナツナ「わかるーー！」

フユキ「でも記念館はありがたいよな。照明と音響設備のある客席数２９９のホールで演劇の練習できるなんて贅沢だよ」

ナツナ「それもわかるーーーー！って、今日は演劇部じゃないって設定でしょ！いつも、実は演劇でした～みたいなオチになるから、今年はそういうんじゃない創作しようって言ってたじゃん！」

フユキ「もう、とっくに手遅れだ」

・３人は沈黙

ハルミ「実は、さっきから思ってたんだけど、これって意味あるんだよね」

ナツナ「今更それ言う？あ、その疑いの目。あたしが嘘ついてるって言いたいわけ？冗談じゃない！証拠はあるんでしょうね！？」

ハルミ「ふっ。お前は今墓穴を掘った。なぜなら…『証拠はあるの？』って言うやつがたいてい犯人であるからだ！」

フユキ「あ、確かに」

ナツナ「あ」

ハルミ「田舎のおふくろさんが泣いてるぞ。お前をそんなウソつきに育てた覚えはないってな」

ナツナ「そんなつもりはなかったんだ！ただこれは…そう、ノリで！ううう…」

ハルミ「大丈夫だ。今お前は自首した。罪は軽くなる。シャバに出てきたら親孝行するんだぞ」

フユキ「今のは自首じゃなくて自白」

ナツナ「刑事さん！（ハルミと抱き合う、しばらくしてから）……と、いうわけで、だましてゴメンね！」

ハルミ「え、これガチ？完全に面白いこと言ったつもりだったのに！」

ナツナ「ごめーん、でも、楽しかったでしょ」

ハルミ「まぁね」

フユキ「そういう問題か？…いや、今重大なことに気付いた。これ普通に無駄な時間過ぎたんじゃないか。あと何分だ？」

ハルミ「さすがフユキ。落ち着いてるわね」

・ＢＧＭ，黒い人出てくる

ハルミ「３５分」ブルゾン…withBはナツナと黒い人

ハルミ「あと３０秒」

・黒ははける

フユキ「はやりのネタぶっこむなー」

ハルミ「面白かった？」

ナツナ「これやりたかったんだー」

フユキ「あーあ、それに黒いやつフツーに出てるよ。いない設定守るつもりないよ、あいつ。ま、こちらは見えない設定を守り続けるしかないんだけど」

ハルミ「いいじゃんいいじゃん、細かいことはさ」

フユキ「しかし…残り時間、微妙だな。短いとも、長いとも言えない」

ナツナ「だね～」

ハルミ「はっ！」

フユキ「ハルミどうした？」

ハルミ「私、解除の方法わかっちゃったかもしれない！」

フユキ「またテキトーなこと言うつもりじゃないだろうな」

ハルミ「うん！今度は大丈夫！これはね…」

・ＳＥ

・シキ花道に登場。舞台上はシキのセリフに合わせて動く。

シキ「またか！っと思った方もいると思いますが、またまたわたくしでございます！えーと、それではいろいろ省きますが！何度も言っている通り、コードをすべて切れば解除できるのです！」

シキ「私たちに与えられた時間は４５分…。まだ台本の半分しか消化しておらず、このままいくと大幅な時間オーバー！！というわけで、このハルミの件は私の方でダイジェストでお送りします」

シキ「おっ、ハルミさん、何か得意げに言っていますね。なになに？これは機械だから、水とか火とかつければ化学反応で止まったり止まらなかったり？おバカさんですね。あれ、ハルミ呆れつつも納得？フユキは絶妙な突っ込み入れてるのに容認！？信じられない３人組！」

シキ「は！？あれは何だ！？温めるって言ってレンジを出したぞ！まさかの、レンジ常備！？ハルミ！どれだけ奥が深い人間なんだ！というか、今、黒い人がレンジ渡しに来てませんでした！？もうなんでもありだ～！」

シキ「どうやらあのよくわからない機械をレンジで温めています。彼らは運がいい…。普通はここでもうドカーンですけどね。何か都合のいい理由で爆発しないんですね。ま、ここで爆発したらお話し終わりですもんね」

シキ「おっと～、レンジの熱でフユキが暑がっている！！さすが冬生まれ！究極の暑がり！あ、誰かを呼んだぞ。また黒い人か～？（黒登場）あー！頭上から雪を降らせている！これはアナ雪かーーー！？」

シキ「さぁー、とか言ってるうちに残り時間がない！えー、進行役として言わせてください。もう、いいんじゃないですか？お客さんも相当ウザがってますよ、ええ、私の存在も含めてね。もう、　わたしもこれ終わりにしたいんですよ。はい、再度確認しておきますね！この爆弾の解除方法は、コードをすべて切ることーーーーーー！！！」

シキ「おっ、私の叫びがフユキに届いたか！？フユキからネジを外して中を見てみようと提案だ！よし、ここでそろそろ現場に戻してみましょう」

・シキはけない

フユキ「あー、開けてみたのはいいが、コードが３本ある。赤・青・黄だ。こういうときは…たいていどれかを１本切ると解除できるけど…。どれ切りたい？」

ナツナ「これ間違ったらドカーンのパターンじゃん。それなのにフユキは冷静ね」

シキ「よーし！いいぞー！あとは、コードを切れば完了～🎵さあここで、いよいよアキヒトを召喚だぁ～！さぁ、アキヒトよ行くがよい！」

アキヒト「はーい、待ってましたーーーー。小さい秋、小さい秋、小さい秋、みぃつけた～～～～♪」

・アキヒト舞台上に突入

ナツナ「あ、アキヒト。やっときた」

フユキ「待ってたのは、こちらなんだが」

ハルミ「遅いよー。今大変なんだからね。しかも、なんかまた歌ってるし。またセルフＢＧＭ？」

アキヒト「そうそう。やれって」

ナツナ「でも、歌なんか変だった」

アキヒト「そう？」

フユキ「だ～れかさんがだ～れかさんが🎵でしょ？」

アキヒト「あー、そっかー」

フユキ「あー、まぁ、そんなことより、待ってたんだけど」

アキヒト「ごめんごめん、定められた事情により、ここまで出れなかったんだよ」

ナツナ「ああ台本上のね」

フユキ「みんなアキヒトに呼ばれたから待ってたっていうのに」

ハルミ「それな」

アキヒト「だから、ごめんって。ったく、こっちだってみんなみたいにもっと出番が欲しかったよ…。シキより出番ないんだよ？まぁ、いいや。分かってたし。で、何が大変なの？」

ナツナ・フユキ・ハルミ「爆弾！」

アキヒト「爆弾？あ、そういえば、爆弾みたいな形のおもちゃみなかった？今朝落としちゃったみたいでさ。鞄の中になくて、それで、今まで探してたんだけど」

ナツナ「それって、四角くて」

ハルミ「なんかタイマーついてて」

フユキ「コード切ったら止まる的な？」

アキヒト「お、みんな詳しいね。それだよそれ！」

・ナツナ～ハルミは顔を見合わせる。

ナツナ「えっとごめんアキヒト！それハルミが拾って、で、あたしが起動しちゃってー」

アキヒト「え、そうなの。ハルミが拾ってるなんてすごい偶然」

ハルミ「おもちゃ？」

アキヒト「うん。さっきそう言ったじゃん。で、遊ぼうと思ってみんなを呼んだんだよ」

ナツナ「なんだ～、そうなんだ～、おもちゃなんだ～。いやぁ、それなら良かった良かった」

アキヒト「よくない。みんなと遊びたくて買ったのに、先に始めてるなんて」

フユキ「いや、でも、これには諸般の事情が…」

アキヒト「つべこべ言わない」

ナツナ・フユキ・ハルミ「すみま千円、二千円。やっぱり足んないから五千円！」

・ナツナがアキヒトになんかよくわかんない機械を差し出す。受け取るアキヒト。

アキヒト「え、弁償してくれるの。ありがと。あれ？」

フユキ「どうした」

アキヒト「これ…、僕が買ったのじゃないよ」

ナツナ「マジで！」

アキヒト「うん」

ハルミ「ってことはーーー」

ナツナ～ハルミ「やっぱ本物！」

・アキヒト以外慌てだす。

アキヒト「本物…って、本物の爆弾？」

ナツナ～ハルミ「そうだよ！」

・アキヒトも慌てて手にしてるものを放り出す。それを慌ててキャッチするハルミ。

フユキ「そうだ！コードを切ろうって話をしてたんだ」

アキヒト「そうなの！？」

ナツナ「そうだよ！っていうか、ハルミ、残りあと何分？」

・ＢＧＭ，黒い人出てくる

ハルミ「（ブルゾン）……２分」

ハルミ「プラス１８秒」

フユキ「ハルミ余裕あるな」

ナツナ「さすがだよ…。でも、２分は語呂悪い」

アキヒト「ね、ね、あの黒い人なに？しかも、はけないでそこにいるんだけど」

ナツナ・ハルミ・フユキ「それは見えない設定！」

アキヒト「は、はい！」

フユキ「あー、とにかく時間ないから、コード切ろう。何色がいい？せーの」

ナツナ「赤」ハルミ「青」アキヒト「黄」

ナツナ「って、みんな違う色ではないか～い」

　・危険を知らせるかのような音が流れ始める

ハルミ「きれいに分かれたね」

アキヒト「なんか、変な音なってるけど、なに」

フユキ「じゃ、全部一度に切るか。もう、悩むのも面倒だし、そうこう言っているうちに残り１分だし」

ハルミ「そんな簡単に決めて大丈夫？もし、これでドカーンだったら、フユキ恨むからね」

ナツナ「ドカーンってなったらもう恨むこともできないでしょ」

ハルミ「それもそうか」

アキヒト「だから！このすごい音なんなの！音響さんの手違い気まぐれ！？」

フユキ「あー、いざとなると緊張する」

ナツナ「さすがのフユキでも緊張するんだね」

フユキ「するよ」

ハルミ「やばいよ！カウントダウン始まった！」

・黒い人が手にしたプレート？スケッチブック？でカウントダウンし始める。

アキヒト「この黒い人も気になるけど、この音なんなのーーーー」

ナツナ「あと３秒だよ！」

ハルミ「あと２秒！フユキ！やっちゃって！！」

フユキ「（残り１秒）プチッとな！」

・警報音はますます大きく。突然ふっとやむ。

全員「………とまったー！！」

・喜びに盛り上がる。黒い人も一緒に盛り上がる。

・やや間のあと、ドカーンと轟音。

全員「キャーーーーーーーーーー（またはウワーーーーーーー）」

・その場で伏せたり、とっさに机にもぐったり。建物が揺れているように。

・轟音がやむと再び警報音。

・それぞれおそるおそる顔を上げる。

フユキ「何が起こったんだ」

ハルミ「こんなときは、ニュースより情報速いツイッター！」

・ハルミが携帯を手に調べる。

・しばらく間。

ナツナ「なんかわかった？」

ハルミ「………Ｊアラートだって」

・シキが上手から登場。上手サスへ。

シキ「ミサイル落下。ミサイル落下。ミサイルが甲信越地方に落下した可能性があります。続報を伝達しますので、引き続き屋内に避難してください」

フユキ「マジか」

アキヒト「ね、これってやばいよね、やばいよね」

ナツナ「やばいなんてもんじゃないよ！あたしたち、これからどうなっちゃうの…」

ハルミ「こうなったらさ、いつものアレやっちゃおうよ」

ナツナ「え、だって、今年こそそれやめようって」

ハルミ「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！」

フユキ「背に腹は変えられない…」

アキヒト「こんな終わり方もうやだよ～」

ナツナ「あー、もう、じゃあ、やっちゃうよ！」

全員「照明さーん、音響さーん、よろしくお願いしまーす！」

・明るい照明に変化、ＢＧＭも明るく変化。

・ちなみにセリフないけど黒い人もずっといます。一緒に和んでてください。

ハルミ「あー、演劇オチで良かった♫」

ナツナ「またブルゾンだし」

フユキ「結局、今年も、今までのは演劇でした…チャンチャンか」

アキヒト「でも、まあ、いいかあ。ウチらしくてさ」

ハルミ・ナツナ「だよねー！」

・全員で和気あいあい

・舞台上照明やや暗くなる。上手のサス明るく。シキ登場

シキ「今年も今まで以上にやりたい放題やってしまいましたが、こうやって楽しく演劇ができる毎日をありがたいと思っている私たちなのでした。それでは、みなさん、また会う日まで」

・音響大きく，上サス暗くなり、シキはける。

・他の人がシキを連れ戻し、さらに和気あいあい。

・閉幕。

全員　「（閉幕直前に）おしまい！」